

木村三郎さんが学んだ戦史を話す

～戦争の実相、詳細に 約50人が参加 8・15学習会～

8・15記念の学習会は9月5日、白子公民館で開かれました。講師は「私家版太平洋戦争戦史・年表シリーズ」を編んでいる木村三郎さん(87)＝津市在住の会員＝。「私が学んだ戦史」と題し、学徒出陣、日米の差、比島戦などについて、学んだ史実を確かな記憶力で詳細に話された。参加者は約50人。次のような感想が寄せられました。

- ・「戦争と平和、生と死、人種、国境について今一度考えねばならぬと思います」
(80代男性)
- ・「このような貴重なお話を生のお声で聞かせていただくことができ、深く感謝しています。木村さんの悲しみや正義が伝わってきました。真実を知る努力をこれからも続けていこうと思いました」(40代女性)
- ・「戦争の見えざる一面を知ることができました。平和の大切さを思いました」
(60代男性)
- ・「同期の皆さまの何よりの慰霊を聴かせて頂きました」(60代女性)
- ・「戦中に育った者として身にしみる話でした」(70代男性)
- ・「太平洋戦争は何て計画性のない無謀な戦争だったかということがお話を聞いてよく分かりました。失われた命に対する愛惜の念が木村さんを戦史研究に向かわせたのがよく分かりました」(60代女性)
- ・「詳しいお話をどうもありがとうございました。太平洋戦争の兵役のウラ話や戦史全般に至るまで学ぶことができました」(20代男性)
- ・「64年間戦争とは無関係だったのは、憲法9条のお蔭です。その分国民の生活水準も上がり、平和な64年でした。この地球から人間が人間を殺すこの戦争をすべてなくする為に、日本が起ち上がりたいと思います。言葉を通じて人間が人間を説得するのが日本の役目ではないでしょうか」(80代男性)



挨拶する竹内代表



約50人の参加があった学習会



木村でございます。3月の設立総会に鈴鹿市外より参加させていただきましたのは、私の同期生500余名が鈴鹿航空隊で偵察訓練を受けたこと、鈴鹿航空隊跡の正面左側の石碑「碧空」を書かれた元航空母艦赤城の飛行長の増田正吾氏と若干のご縁があること、さらに私の兄が海軍飛行整備科予備学生で横須賀の追浜航空隊で訓練を受けたのち、昭和17年にセレベス島のケンダリ基地で1年従軍し、その後郷里の伊賀に近い鈴鹿航空隊に1年間勤務になった、ことなどからです。

学徒出陣

私は、昭和18年12月に海軍に入隊しました。当時の日本男子は「国民皆兵」で満20歳で徴兵検査を受けて兵役に服するのですが、大学生や専門学校生は卒業まで徴兵猶予がありました。戦局が急になるにつれて「在学徴集臨時特例」によって徴兵されました。いま一般には文科系が動員され、理科系の学生は徴兵免除されていたと言われてはいますが、それは嘘です。残ったのは医学部、機械工学関係で理科系でも自然科学系は徴兵されました。その総数は10万とも12万とも言われていますが、軍の機密であったために文部省はその実数を把握していません。毎年12月ごろテレビで放映される明治神宮外苑の雨中の行進風景は、昭和18年10月21日です。

陸軍は12月1日、海軍は12月10日に横須賀、呉、佐世保、舞鶴の海兵団にそれぞれが入隊、最下級の「海軍二等水兵」でした。入隊後の2か月は教員兼班長によって手荒くしごかれました。

舞鶴はあまり雪は積りませんが、訓練でその上を歩兵銃を持って匍匐前進させられ全身が泥にまみれ、古いレンガ作りの兵舎内のスチームと体温で短時間で乾きました。こうして2か月後にはさらにふるいにかけられて、二等水兵と士官教育兵に分けられ、士官教育兵のうち飛行科生は鹿児島と三重の一志郡香良洲の海軍航空隊へ入隊しました。鹿児島は非搭乗員でしたが、香良洲は搭乗要員として教育されました。私は徳島・高知などで8か月、松山では実地見習、その後倉敷航空隊で実務につきました。

「海軍二等水兵」の時期でいろいろ教育されたことを紹介しましょう。一つは「出船の精神」です。帰港した船の誰もが早く上陸したいのですが、常に出撃に備えて船首を沖に向けて停泊させる。もう一つは「5分前の精神」ですが、軍艦旗掲揚などの集合時には必ず5分前に全員が整列するなど、次の事態に即応する、との心がけを学びました。さらに「かわや番（トイレ）」精神を徹底して叩きこまれました。かわやの清掃は、徹底的にピカピカにしなければなりません。戦友の一人はこれに合格せず上官より「ここを舐めろ」と言われました。戦前の正装である高価な「仙台平の袴」をはいて座ってもいいようきれいにしろ」と教えられました。戦後、世帯を持ってからも努めてかわや掃除をしてきましたが、退職後はほとんど私の仕事になっています。

開戦後の日本とアメリカの違い

敵性語として英語は中学校や女学校で使用禁止となり、その反面米国では、日系2・3世を集めて教師として軍内に日本語学校を設置し、大学出の志願兵に1年間日本語をマスターさせ第一線に送りました。その中から日本の文化勲章を受けたドナルド・キーンなどの知日家が出ました。彼らは日本兵の残した日記や手帳を読解して日本軍の動向を察知し、日本人捕虜を尋問しました。米軍の首脳にもダグラス・マッカーサーのようによく日本のことを知っている人がいました。若い時にしばらく日本に滞在していました。マニラの宿舎のホテルの1室には暖簾がかかり、机の上には彼

の父と児玉源太郎大将との写真、本棚には日本に関する書籍などが残っていました。

米軍は昭和20年7月中ごろに原子爆弾の開発に成功し、ルーズベルト大統領とチャーチル首相との間でその最初の使用を日本とするについての申し合わせがありました。日本の投下候補地は、「原子爆弾投下都市選定委員会」で当初は「京都、新潟、小倉」の3都市でありましたが、陸軍長官スチムソンは「京都」投下に頑として反対しました。選定の理由は京都は三方を山に囲まれており、原子爆弾の効果を図るには好適地でありました。スチムソンは京都が日本の古都であり、ここを壊滅することは、戦後、日本と友好関係を構築する上に支障があると強調、大統領がこれを承諾しています。このように米軍には日本通が多かったが、日本軍には米国通はいなかったようです。私は以上を両国の特徴的なことと思っています。

日本は資源に乏しく軍隊はいわば「着た切り雀」の状態、食料は現地調達で中国と長い戦争を続けていました。当時は東北地方は冷害のため資源も乏しく、外地への補給もままならなかった。最初は「軍票」を使っていたが、その信用が落ち始めると略奪が横行し、抵抗した住民に大きな被害を与えました。こうした日本兵が、戦後にB・C級戦犯となりました。

罷り通るウソの証言

戦後60年になると、戦記も信頼できないものが見られます。一例として平成19年7月にNHK出版部が発行した『硫黄島玉砕戦』の中に、当時17歳の通信兵の証言を記すものがあります。当時の通信傍受装置では到底不可能なことが記述されていて、高度一万メートルを飛行するB29機内の音を傍受したとあります。ありもしないバカげたことが書かれています。冷静に考えれば正に荒唐無稽な内容です。戦史や戦記には筆者にとって都合よく書かれたものがあり、余程注意しないと嘘や誇大なことが正しいこととして通用することを心配しています。

比島戦

太平洋戦争は愚かな戦争でしたが、フィリピンでも同様に多数の兵士が犠牲になっています。当初ルソン島での作戦が計画されていましたが、10日もたたないうちに指揮官の山下奉文大将を蚊帳の外において参謀本部は寺内寿一元帥とでレイテ島作戦に変換してしまいました。

当時米軍の機動艦隊は、レイテ島上陸の輸送部隊を終結させるに当たって、日本軍の攻撃を防ぐために九州南部の航空基地を攻撃しました。第5航空艦隊司令部は米軍が台湾沖にあることを発見して、夜間奇襲攻撃を仕掛けました。この時点では搭乗員の能力は開戦時よりも大幅に低下し、技術的にも精神的にも弱体化しており、そのため夜間に米軍艦隊への突撃した戦果を確認できず、第5航空艦隊司令部は大戦果として発表しました。ガダルカナル以来の敗戦続きでの厭戦気分になっていた国民は高揚しましたが、実情は「誤報」でした。

たまたま当時、マニラ第14方面の軍司令官に赴任中の堀栄三情報参謀は、この戦果を聞いて鹿屋基地に行き帰着した搭乗員から詳しく聴取の結果、戦果に疑問を持ちその旨を参謀本部に打電しましたが、これが瀬島龍三作戦参謀に握りつぶされました。瀬島参謀は大戦果を信用し、ルソン島作戦からレイテ島作戦に変換しました。これが比島作戦の大きな誤りでありました。山下将軍は、レイテ作戦を練りましたが、米軍の圧倒的な戦力に敗れました。レイテ島では京都伏見の第16師団、その傘下の久居の第33連隊は玉砕。私の小中学校の先輩たちも多数戦死しています。

米軍の海兵隊

敵もよくやったと思うことが二つあります。「海兵隊」と「ブルドーザー」の使用です。レイテ湾岸に上陸したブルドーザー群は、日本軍がショベルともっこで3~4か月もかけて掘った戦車壕をものの30分ぐらいで簡単に埋め、戦車や歩兵が上陸しました。ルソン島北部の山岳戦でもブルドーザーが険しい山岳を削って道路を作り、戦車が迫ってきた。このように日本軍と米軍との兵力は、段違いの戦闘でした。米軍の海兵隊は陸軍と海軍との中間にあたり、休日を除き毎日18時間、700日訓練し、特に装備は40kgに自動小銃(15kg)、機関銃(20kg)を持って上陸する果敢な部隊だった。沖縄では時々悪さをしているが、先輩は敵ながらよくやりました。海兵隊出身者のうち、戦後は駐日大使のマンズフィールドなど閣僚を務めた者もいて、上院議員には3人、

国務長官には2人など、政治家には海兵隊出身が多い。

米軍のレイテ上陸作戦に対して、日本軍は4艦隊で対応しました。3方から分かれてレイテ湾突入を計画しましたが、栗田艦隊は直前に謎の反転をし、志摩艦隊も直前で反転しました。唯一西村艦隊のみ老朽戦艦山城などでレイテ湾に突入し全滅した。戦後『連合艦隊の最後』を書いた伊藤正徳氏は、栗田氏に「なぜ、反転したのか」を問いかけているが、栗田氏は「三日三晩不眠不撓の戦闘を続け、疲労困憊のために反転した」と語っている。伊藤氏は、栗田氏の水戸中学一年後輩です。

レイテ沖海作戦は、日本海軍の末期的症状かとも考えられます。ただ、小沢治三郎中将が「おとり」になって米軍の機動部隊を比島北方へ誘い出すことに成功しました。小沢部隊は空母艦隊で「おとり」作戦の成功を打電しましたが、アンテナが低かったためにレイテ湾突入艦隊には電波が届きませんでした。

私は海軍の地上勤務で、飛行要務士でした。要務士の仕事は、偵察機が撮影してきた米軍の基地や飛行場、艦艇などをの判定や「戦闘概報」、「戦闘詳報」の作成です。ルソン島では、飛行用要士の戦死者が多数ありました。陸上戦に加わって病死（マラリヤ）や餓死したのであります。私が戦史年表をつ作ったのは、同期の戦友たちの亡くなった状況の経過を詳しく調べることで、戦友たちを慰霊するためであります。

航空特攻は、大西瀧治郎第一航空艦隊長官が始めたもので、大西長官がマニラの司令部に着任したとき、可動機が50機足らずで、これでは1機で1艦を葬らねばと米軍への体当たり攻撃を開始した。敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊などの神風特別攻撃隊。特攻機の搭乗員は、出発と同時に戦死者名簿に登載され、戸籍を抹消され、2階級特進し、郷里では盛大に葬儀が営まれました。中にはエンジン不調や不時着などで戻ってきたものもあったが、その部隊では戦死扱いなので何回も特攻に出されました。生き残って戦後復員、戸籍を復活して帰郷したところ、親兄弟から「幽霊が帰ってきた」と言われ、「お前の墓があるぞ」と言われたとのことであった。

大西長官は「特攻は、外道である」と言っています。大西中将は軍令部次長という作戦のナンバー2となりました。沖縄作戦でも海軍は依然として特攻を続けましたが、米軍は迎撃態勢を充実し、特攻の戦果は上がりませんでした。それでも特攻は続けられました。私は大西中将を憎みます。私の戦友が大勢戦死したからです。大西長官は最後まで徹底抗戦を主張して、海軍大臣米内光政から叱責されました。海軍でも厚木、大分の分隊のように徹底抗戦を叫ぶ部隊もありましたが、大半は天皇の詔勅に従って粛々として終戦を迎えました。当時は軍人勅諭により「上官の命令は朕の命令」であり、上官の命令はどんな命令でも聞かざるを得なかったのです。中国や南方で残虐な行為をしたのは、みな上官の命令でやっているわけです。そういうことでB・C級の戦犯で非常にたくさんの方が犠牲になりました。特攻をはじめ上官の命令が、我々若い者の命をたくさん奪いました。愚かな戦争をしたと思います。

毎年8月には、戦争と平和の思いを新たにしました。9月は天災と防災の月です。私は伊勢湾台風の際に浜島の水産試験場におりましたが、研究室の一隅に妻と乳飲み子が一晩過ごせる準備をして避難しました。構内の漁業無線局の15メートルの鉄塔がワンワン鳴り、建物が倒壊するかと思いましたが、88年間の人生で怖いと思ったのは初めてでした。戦時中航空隊で対空見張り中、背後からグラマン機に襲撃されたましたが、ひとり者でありいずれは死ぬものだと覚悟しており、怖いとは思いませんでした。台風の際に初めて怖さを感じました。

*質疑応答

「なぜ戦争は、途中で止められなかったのでしょうか」

東条英機（総理・陸軍大臣）が憲兵を一般社会にも拡大し、内閣批判や反戦思想者の身柄を拘束しました。東条退陣後も、憲兵や特別警察が権力を振り、和平工作をする者を摘発、拘束したため、終戦することが言えず、身の危険を感じて動くことができなかつた。日露戦争では、当初より政治も軍部も共に指導部が終戦について検討していました。

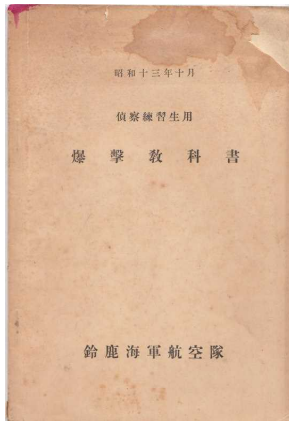
「海軍入隊時代はお若いころだが、今日の話などはどのようにして知ったのか」

三重県庁退職後、いろいろな戦史・戦記を買い集め、また三重県立図書館に通い防衛庁戦史史料室刊行の『戦史叢書』を閲覧し、また東京の防衛庁戦史史料室に行き閲覧調査しました。

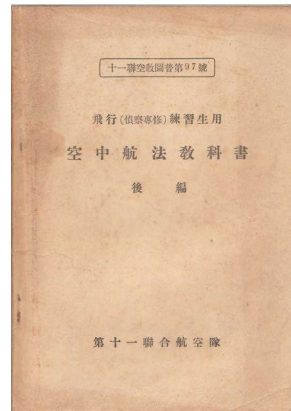
【資料紹介】

「鈴鹿海軍航空隊」 訓練講義資料

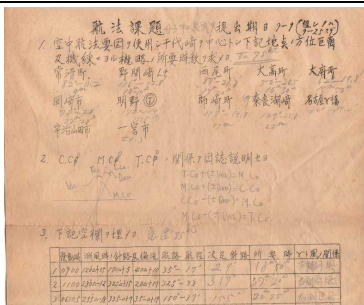
(個人蔵)



「爆撃教科書」
 昭和13年10月発行の偵察練習用の教科書で、開隊時に使用されていたものです。爆撃に際しての射撃角度など数学に重点がおかれています。



「空中航法教科書」
 「第11連合航空隊」発行となっていますが、鈴鹿海軍隊で使用されていたものです。地図、計器、航法に関する物理など多方面にわたる教科書です。

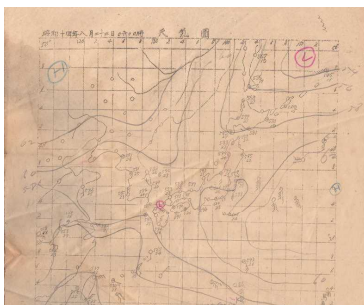


「航法課題」
 教官提出用のレポートで、飛行地点の方位、角度、飛行時間などを計算して提出することになっています。常滑町、野間崎、師崎、明野など伊勢湾周辺の地名がみられます。

「米国。英国艦隊一覧表」

米国艦隊				英国艦隊			
艦名	速力	排水量	搭載機数	艦名	速力	排水量	搭載機数
USS Yorktown	27	10,000	15	HMS Ark Royal	27	10,000	15
USS Enterprise	27	10,000	15	HMS Illustrious	27	10,000	15
USS Hornet	27	10,000	15	HMS Indomitable	27	10,000	15
USS Lexington	27	10,000	15	HMS Formidable	27	10,000	15
USS Saratoga	27	10,000	15	HMS Furious	27	10,000	15
USS Yorktown	27	10,000	15	HMS Victorious	27	10,000	15
USS Enterprise	27	10,000	15	HMS Queen Elizabeth	27	10,000	15
USS Hornet	27	10,000	15	HMS Hood	27	10,000	15
USS Lexington	27	10,000	15	HMS Prince of Wales	27	10,000	15
USS Saratoga	27	10,000	15	HMS Bismarck	27	10,000	15

敵機爆撃にあたって、各戦艦の大きさや、速度、主力砲などを記した一覧表である。発行が昭和14年のため、後の真珠湾攻撃で撃沈される「アリゾナ」や「オクラホマ」などのアメリカ艦船の名が記されているのが興味深い。



「天気図」
 飛行兵にとっては天気はとても大切な要素で、講義でも天気に関してはしっかりと教わったことがわかります。天気図は現在と基本的には変わりません。



「吉野を訪ねて」「奈良にあそぶ」
 昭和16年9月と17年2月の鈴鹿海軍航空隊員の隊員旅行のしおりである。開隊当初より分隊別に9月と2月に旅行に出かけることがあり、奈良、京都方面が主であった。厳しい訓練の中にあってひとときの楽しみであった。しかしこの隊員旅行も太平洋戦争が始まると中止された。

第2回 戦争遺跡見学会のご案内 (参加無料)

- ・日時 2009年11月28日(土) 小雨決行
- ・集合 13時 スズカハンター屋上駐車場 (分乗で行きます)
(鈴鹿市算所2丁目5-1、近鉄平田町駅より徒歩10分)
- ・見学場所 市内旧陸軍施設を見学します
陸軍第一気象連隊跡、陸軍第一航空軍教育隊跡、北伊勢陸軍飛行場跡、
コンクリート製掩体、など
- ・その他 参加希望者は同封のはがきにて必ず返信して下さい。



陸軍第一気象連隊跡碑



陸軍第一航空軍教育隊弾薬庫



北伊勢陸軍飛行場格納庫跡



コンクリート製掩体

第2回「鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会」総会のご案内

- ・日時 2010年4月4日(日) 受付：午後1時～1時30分
総会：1時30分～2時15分
記念講演：2時30分～3時30分
- ・場所 鈴鹿市労働福祉会館 (鈴鹿市神戸地子町388、中央道路そい、消防署西)
- ・講演会 「戦争と文学」清水信さん (文芸評論家、鈴鹿市在住)

会報3号編集後記

8月14日から21日まで、白子公民館ミニギャラリーで、鈴鹿市の戦争遺跡写真展を開きました。10月25日には、第4回風の街の文化祭「市民交流広場」で同様な写真パネルを展示。ささやかながら、市民に会の存在を知ってもらう場となりました。また、鈴鹿市議会では、9月定例会で中西大輔議員がNTT跡地にある鈴鹿海軍航空隊の格納庫の保存問題を取り上げてくれました。昨年12月の定例会で後藤光雄議員が質したのを受けた質問でした。会が発足して半年余り。少しずつ理解が広がっていく感じです。(竹内)

鈴鹿市の戦争遺跡を保存・平和利用する市民の会

代表 加藤二三子、竹内宏行
〒510-0254 鈴鹿市寺家1-2-47
電話 059-388-6508
メール ta818hi@mecha.ne.jp

HP <http://www006.upp.so-net.ne.jp/asao/peacesuzuka.htm>

